

付篇5 朝鮮三国時代の伽藍配置と海会寺

堀 田 啓 一

はじめに

泉南市信達大苗代の一岡神社境内に所在する海会寺跡は、三次にわたる発掘調査の結果により、大阪府下の最南端に位置する奈良前期（白鳳時代）の立派な法隆寺式伽藍配置をもつ、古代寺院であったことが判明した。周知の如く、法隆寺は聖徳太子が建立したもので（四天王寺式）、この寺院が670年に焼失した後に708年から715年にかけて再建されたものである。現存する再建の法隆寺式伽藍配置は、中門を入れて左に塔を右に金堂を配し、この三建造物を廻廊で区画したもので、その後（北）方伽藍中心線上に講堂を配置するものである。

この法隆寺式伽藍配置の古代寺院は、わが国に最も近い国の大韓民国（以後韓国とする）や朝鮮民主主義人民共和国（以後共和国とする）に所在する。いわゆる朝鮮三国（高句麗・百済・新羅）時代の伽藍配置と比較しつつ、法隆寺式伽藍が東アジア史的にどのような意味づけができるか、伽藍配置をめぐる古代日朝寺院の関係について、その実体の解明にせまってみたいと思う。

1 高句麗寺院の伽藍配置

1945年の解放後、共和国や韓国では日韓併合後のわが国考古学者達の発掘調査、研究を止揚して各々が独自の発掘調査や研究を進めて、より多くの成果をあげているのが現状である。朝鮮三国時代の寺院に関しては、共和国側では高句麗時代を中心とした研究を、韓国側では百済や新羅をはじめ統一新羅時代にわたる研究を、それぞれに進行してわが国古代寺院の研究にとって、貴重で重要な成果を提示されているのである。

高句麗の寺院について『三国史記』や『三国遺事』によると、高句麗時代における古代寺院の記載は14寺1塔に及ぶ。肖門寺（巻18. 高句麗本紀第6. 小獸林王5年＝西暦375）、伊弗蘭寺（同上）、平壤九寺（同上、広開土王2年＝393）、金剛寺（巻19. 本紀第7. 文咨明王7年＝498）、盤龍寺（巻22. 本紀第10. 宝蔵王9年＝650以前）、靈塔寺（遺事巻3. 高麗靈塔寺の条）、育王塔（遺事巻3. 遼東城育王塔の条）などをあげうる。また、三国時代において最も早く仏教を取り入れたのは高句麗国で、『三国史記』によれば小獸林王2年（372）夏6月条に

「秦王符堅遣使及浮屠順道。送佛像經文。王遣使迴謝。以貢方物。立太学。教育子弟。」とあり、前秦王の符堅が僧順道と共に佛像や經文を、高句麗へ送ったのが始まりであるといえるので、その後に寺院の建立が流行していったものである。考古学的にはこれらの事実を証明するものとして、吉林省集安鴨綠江中流域にある5世紀末の長川1号墳の壁画に、僧侶をはじめ諸仏・飛天など多くの仏教的様相が描かれていることが証明する^①。

しかし、文献にみられる高句麗の諸寺は、考古学的発掘調査により確認されておらず、平壤周辺でこの時期の寺院跡が数カ所で確認されたにとどまる。その中で日本の学者達により調査されたのは、清岩里寺址（金剛寺？）と上五里寺址と元五里寺址の三カ寺であり、解放後に共和国の学者達により発掘調査されたのは、定陵寺のみである。

清岩里寺址の調査は1938年から39年の2カ年にわたり実施されて^②、一辺が約9.5メートル八角形の塔址と考えられる建物を中心に、東・西・北の三方に金堂とみられる建物址（飛鳥寺と伽藍配置が同じ）が、南方には中門址とみられる建物址が検出された。このことから、現在は「一塔三金堂式伽藍配置」をもつ寺院址であることが判明したのである。

定陵寺は東明王陵とその付近一帯の高句麗遺跡を、1974年の春と秋に100余日にわたり発掘調査された成果として公表された。この報告書は金日成綜合大学が、大学創立30周年を記念して1976年9月20日に、金日成綜合大学出版社より発行された大冊である^③。その目次は第1章が「東明王陵と眞珠池」、第2章「東明王陵付近の高句麗古墳」、第3章「建築址」の3章からなり、定陵寺に関する報告は第3章で第1節発掘前の状態と発掘進行、第2節建築址建物の平面配置、第3節建物跡の構造、第4節遺物にわけて詳細な報告がなされている。

この寺院址が「定陵寺」であることが判明したのは、寺院址より出土した土器片に「定」や「定陵」、「陵寺」等と線刻した文字がみられることによる。また、『高麗史』や『新增東国輿地勝覧』に中和郡に眞珠墓という陵墓の記載があり、この眞珠墓と関係深い陵寺として建立されたものと考えられる。定陵寺の建物群平面配置は大きく5区域に分けられ、その中央部に主要寺院建物とみられる伽藍が存在する（図19参照）。この中心伽藍は中門を入れて、中軸線のやや東寄りに1辺が8.4メートルの八角二重基壇をもつ塔を中心に、東西に各1棟づつ金堂を配置している。この東西金堂は共に桁行三間、梁間二間と同じで塔に面して配置されているが、東金堂側は平部（桁行）長軸の南北線両端が塔のそれと平行合致しているのに対し、西金堂は建物全体規模も大きく平部長軸南北線の両端が、塔のそれと若干南方へずれていて左右均整のとれたものでないことが注目される。

この主要伽藍の北方には後世に付加されたとみられる廻廊で一線を画し、南面する3棟の建物址が東西一列に配置されている。この3棟建物の中、中央の礎石位置が確認されて

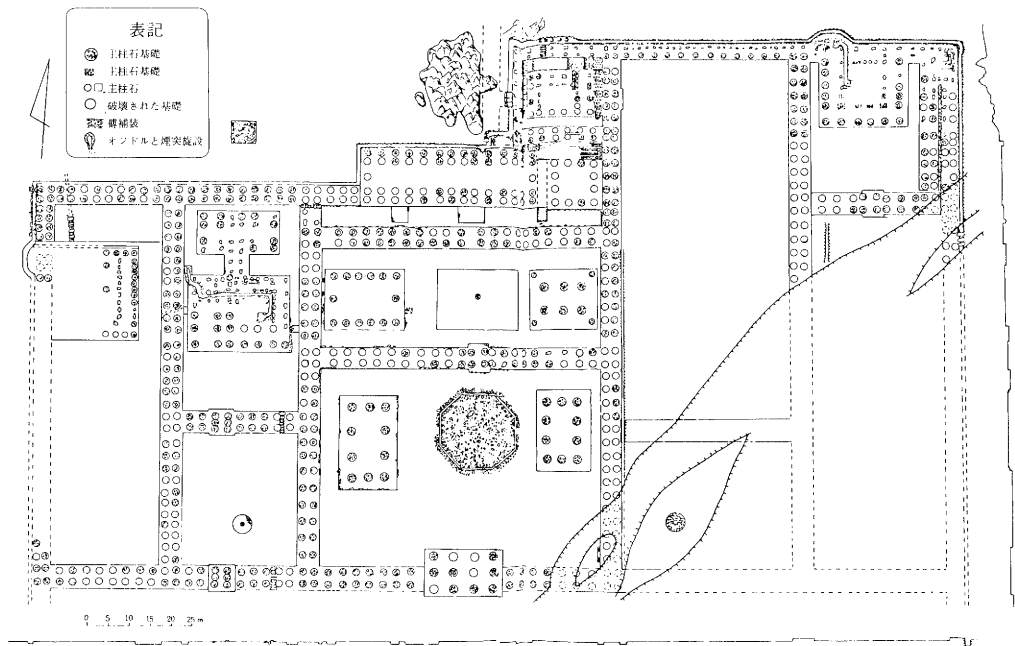


図19 定陵寺の伽藍配置図（註③文献より）

いないのが中金堂の性格をもつものと考えられ、東方の四隅に柱を建てた桁行2間×梁間1間の建物は鐘楼と思われる。また西方の桁行5間、梁間2間の建物は性格不明ではあるが、後の経楼を含めた倉庫的性格の建物ではないかとみられる。そして、中金堂の北方には後世に付加されたとみられる廻廊で画された北方に、東西44メートル×南北14.5メートルを測る桁行13間、梁間4間の講堂址的性格の建物が確認された。この主要伽藍部分の左右（東西）には、南北に細長い付属建物敷地が二区画ずつ並列しているが、東方部の二区画は西方のものに比して南端部は一致するも、北方端部はやや拡大されて大きくなっているという違いがある。

以上みてきた如く、定陵寺の伽藍配置は非常に広大で特異な形式をもつものである。この定陵寺と解放前に調査された清岩里寺を比較すれば、共に一塔三金堂式の伽藍配置をもつ寺院であることがわかり、高句麗での寺院伽藍の特徴を示すものと思われるのである。定陵寺の報告書159頁には

「しかし、全般的にこの建物址の平面配置は金剛寺のそれと同じ構図でなるものと断定でき、差異点はこの建物址の建物配置が金剛寺に比して精確性が、いくらか不足した所がみられるのである。

この建物址の瓦も金剛寺跡のものと多くの共通性がみられる。瓦の中でも軒丸瓦の文

様が金剛寺跡のものと大部分共通する事実は、二遺跡間の年代上の差異がそんなに大きくないということを意味する。」

と述べられている。ここでいう金剛寺は清岩里寺址のことで、『三国史記』には金剛寺は498年に創建され、^⑤『新增東国輿地勝覧』に記されている位置は平壤市大城区域清岩洞の辺りと比定される。^⑥定陵寺の伽藍配置には、寺院部分と僧坊やそれに付随する建物群が、廻廊で区画されているとはいえ未分化の状態を示している。このことからしても、金剛寺が清岩里廢寺として考えると、この寺院の方が独立した伽藍配置のみで、寺院としての住宅跡からの独立性を示していることから後出のものとするのが妥当のようである。それ故、定陵寺の創建年代は5世紀末葉以前と考えられるが、しかし、数次にわたる長期の増改築も検討していかなければならないであろう。

2 百濟寺院の伽藍配置

『三国史記』によると、百濟への仏教伝来は高句麗より遅れること12年、枕流王元年(384)晋よりきた胡人の僧摩羅難陀に始まるのである。^⑦そして、枕流王2年春2月には「創仏寺於漢山、度僧三十人」とあり、翌年には漢山に仏寺を創建したという記事がみられる。文献上にみる百濟寺院は漢山仏寺をはじめ、王興寺(卷27. 百濟本紀第5. 法王2年=西歴600)、漆岳寺(同上)、烏含寺(卷28. 本紀第6. 義慈王15年=655)、天王寺、道讓寺、白石寺(同上、義慈王20年=660年以前に創建)、彌勒寺(『三国遺事』卷第2. 武王の条、在位600~641年)の8カ寺があげられる。この中、彌勒寺に関しては『三国遺事』の脚註に、「国史には王興寺と云う」ともあることを付記しておきたい。^⑧

考古学的にみて百濟寺院は、百濟初期に属するものと考えられる漢江流域での寺院発掘はなく、中・後期に属する寺院址は公州・扶余・益山等の地域で若干の発掘調査が実施された。^⑨解放前における調査により、寺院の伽藍が明確となったのは軍守里廢寺と東南里廢寺である。^⑩軍守里廢寺は一塔式伽藍の四天王寺式で、東南里廢寺は塔のない伽藍中央部は金堂のみという特殊な寺院であった。^⑪解放後に韓国考古学者達による発掘調査は、金剛寺をはじめ定林寺や彌勒寺の3カ寺であるが、この中で最も注目される伽藍配置をもつ益山彌勒寺について、以下にその発掘調査結果の概要を述べてみたい。^⑫^⑬

益山郡金馬面箕陽里に所在する彌勒寺は、武康王(武王)の在位中600~641年の間に創建されたもので、『三国遺事』卷第2 武王条(註8参照)に記録されている。益山彌勒寺は北方に美しい彌勒山をいただく南麓に、塔と金堂を中軸線上に配置する伽藍を中央と東西の三列に配置し、その北方に一つの講堂を共有するという特殊な伽藍配置をもつ寺院であった(図21参照)。

彌勒寺の発掘調査は1974年東院と呼ばれる塔址を中心に実施され、西院の半壊石塔と同

じ規模と様式の石塔基壇であることが判明した。その後、1980～84年にかけて史跡整備の為の発掘調査が実施され、発掘部位は寺院全域にわたり現在も外郭部分の発掘が継続調査されている。その発掘調査の結果、伽藍は東西が172メートルの南廻廊を中院と東西両院が共用し、基壇幅が6.6メートルを測る複廊であることが明らかとなった。中央部分の伽藍（中院）は、中門を入れて塔と金堂を廻廊でめぐらし、東西両院の塔と金堂の規模と比較して大きい。このことはこの中院伽藍が、益山彌勒寺の中心的性格をもつ伽藍であったことを意味するものと思われるのである。また、塔遺構のあり方は中院が木塔、東西両院が石塔という違いも注目されるし、廻廊について東西北方の三方は一体となり、中院廻廊を東西両院が兼用している。そして、西廻廊は78.3メートルの長さで東折して幅狭くなり、東廻廊も西廻廊と同じ長さで西折して幅狭くなり、東西両院の北廻廊は各々19メートルでその端部に廻廊基壇の南縁が一致するようになっている。

講堂は前述した如く、中・東・西の三院が共有するところから一棟しかなく、東西68.88メートル、南北19.5メートルの巨大な単層基壇をなし、南面して3カ所に階段施設をもつが桁行や梁間などは不明である。このようにみてくると、益山彌勒寺は基本的伽藍は高句麗寺院の定陵寺、清岩里廢寺（金剛寺）の様式の影響を受けつつも、百済独自の伽藍様式を創造して百済国の特色を誇示しようという傾向が推測される。このことは百済の仏教伝来が、中国の南朝との関係ではじまるとはいうものの、同族たる高句麗の影響も強く受けつつ、百済国威の発揚と自負が7世紀前半頃を中心に活発化し、彌勒寺式伽藍配置を生み出したものと考えられなくもないのである。

3 新羅寺院の伽藍配置

朝鮮三国時代の中で新羅は高句麗・百済両国に比して国勢は弱かった。しかし、最初は高句麗国の庇護下で着々と国勢を貯えて、最後には唐帝国と連合して終局的には朝鮮三国時代を統一して、朝鮮半島の覇者としての歴史を形成したのである。それだけに古代寺院も多く、首都慶州をはじめ全国に統一新羅時代の寺院が分布し、統一新羅時代以前の寺院を含めて文献上での寺院数は、総数約70カ寺を数えるに至るのである。

『三国史記』によると新羅に始めて仏教が伝来したのは、法興王15年（528）に個人的布教の意図で墨胡子が中国より高句麗を経て新羅に入り、善山付近の毛札家の保護下で布教活動を行ったようである。^⑭この法興王15年は、新羅での仏教信仰が公認されたことを意味し、国家としての仏教公認を意味するところより、個人的に仏教の信仰はこの年より若干さかのぼる可能性は考えられよう。どちらにしても新羅への仏教伝来は、高句麗・百済の4世紀後半と比較して5世紀前半頃と時期がずれるのである。新羅法興王時代は国威が高揚する時期であり、王の23年（536）には始めて建元元年と年号を改め、従来の高句麗

国従属の関係が一変する頃でもある。また、僧墨胡子は遠路中国・高句麗を経て新羅への布教が、墨胡子の堅い決意がみられる反面で新羅へ入国しなければならない問題も存在したのではないかと考えられるのである。どちらにしても新羅仏教は、前述の史的背景を考慮すれば北方系仏教であったものと推察できるのである。

文献でみる限り、新羅で最初に創建された寺院は興輪寺である。『三国史記』眞興王5年（544）春2月条に「興輪寺成」とあり、^⑮『三国遺事』にも「眞興大王即位五年甲子、造大興輪寺」とあることより、興輪寺の落成が西暦544年で新羅最古の国家行事による寺院であることがわかる。また『三国遺事』の前記録の脚註には、「この興輪寺建立の開始は法興王十四年から」であることがわかり、^⑯仏教公認も法興王14年からであることが記載されている。^⑰興輪寺の発掘調査は1970年、京釜高速道路工事に伴い緊急調査が実施され、西廻廊北半部で基壇の確認と講堂址地は削平が著しく、その実体を解明できなかったようである。^⑱このように新羅の初期仏教建築は、首都慶州に建立されるのであるが、この興輪寺と共に注目される皇龍寺をあげねばならない。この新羅二大寺院は、わが国古代寺院たる四天王寺や法隆寺と創建年代をほぼ同じくしており、その中で皇龍寺は本格的発掘調査が実施され、立派な報告書も出版され^⑲韓国学者の優れた研究もある。

皇龍寺は眞興王14年（553）王命により建立が開始され、同王27年に14か年の歳月を経て完成されたことがわかる。^⑳皇龍寺の伽藍研究は、藤島亥治郎氏により復元作業が実施され、一塔式伽藍の四天王寺式として考察されたのである。^㉑皇龍寺創建の由来は眞興王が月城の東に新宮を建立しようとしたところ、この地に黄龍が現われ王がこれをあやしみて仏寺となしたとある。^㉒そして、特に『三国遺事』の皇龍寺記録と発掘調査の内容を比較検討し、伽藍配置の形式が大きく第1次伽藍から第4次伽藍へ変化発展したことが明らかとなった。^㉓

皇龍寺に対する本格的発掘調査は、寺址の保存と整備の為に1976年から開始され、寺域の内部に至る調査が完了したのは1983年であり、8か年の長期にわたる大規模の発掘調査となった。^㉔創建時代の伽藍は高麗の高宗25年（1238）と、それ以前にかけて焼けつくした建物遺構下に^㉕痕跡として残っていた（図20参照）。㉖この創建時伽藍は中心伽藍が中門・塔・金堂・講堂と続く四天王寺式で、その東西に各々両院が中心伽藍廻廊を共有して三院伽藍配置となっている。しかし、この時期の塔と金堂は第2次（重建時）のそれと同位置に存在し、重建時の塔・金堂基壇の為に完全に削平されたものとみられる。㉗第2次の重建時伽藍は講堂が現存講堂址と同位置に、桁行10間×梁間4間の規模で存在し、中門址は創建時のものより南へ約6メートルの位置に、桁行4間×梁間2間の遺構が検出された。中門を入った北方に初層が桁・梁とも7間ある大規模九層木塔を配置し、その北に桁行9間

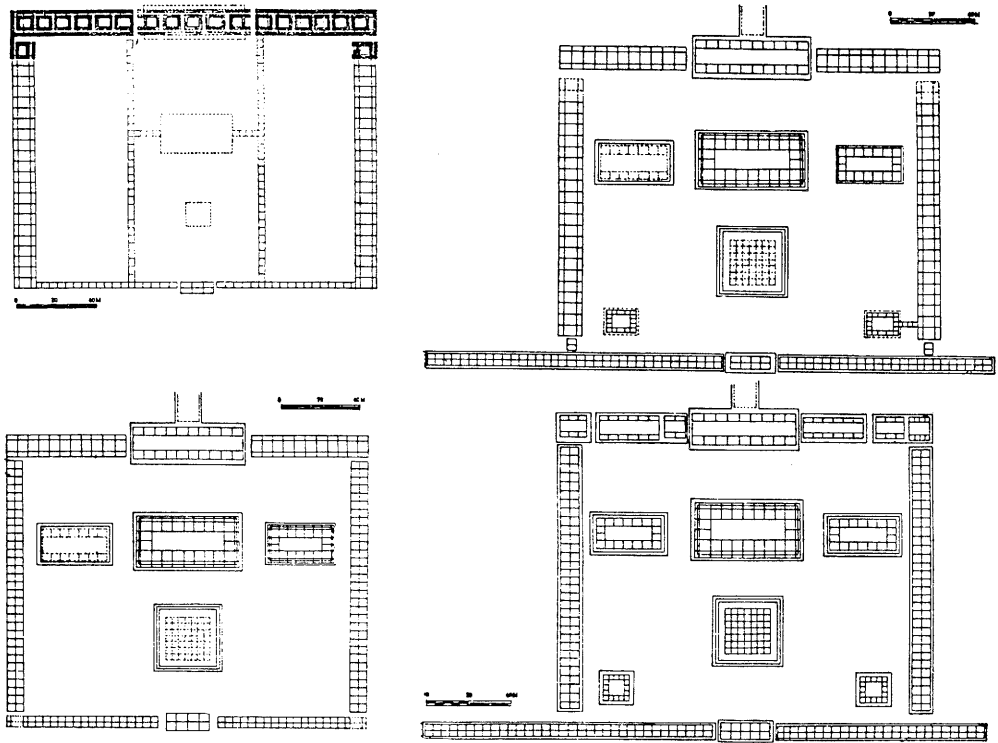


図20 皇龍寺伽藍変遷図（註⑬より）

（左上図：創建時 左下図：第2次〔重建時〕 右上図：第3次〔再重建時〕 右下図：最終時

×梁間4間の中金堂がある。この金堂の左右には、中金堂よりやや規模の小さい東西二金堂が配置されており、共に桁行7間×梁間4間の規模でシンメトリカルに配置するという、古代の寺院伽藍としては非常に特異なものであった。第3次（再重建時）伽藍、最終伽藍に関しては鐘楼や経楼が伽藍内に配置されるが、紙数の関係もあるので省略させていただきたい。

以上の如く、朝鮮三国時代の古代寺院伽藍をみると、高句麗では定陵寺にみられる三院伽藍の未分化から、清岩里廃寺（金剛寺）にみられるように一塔三金堂伽藍配置へと発展した。また、新羅でも皇龍寺伽藍配置の変遷では、三院形式から一塔三金堂形式へと発展整理された傾向が、高句麗の伽藍配置の変遷と同様であり、この意味は高句麗・新羅両国の政治的従属関係が基本的な歴史背景となっているものと考えられる。一方、百済における益山彌勒寺は、高句麗・新羅両国とは異なり一塔式伽藍配置から、三塔・三金堂・三院形式の伽藍配置へと逆の発展傾向を示すことは注目されて良い。この相異点は朝鮮三国時代の国際関係、朝鮮半島内での高句麗・新羅と百済との政治的対立関係を反映し、他面で

は清岩里廢寺（金剛寺）と皇龍寺や益山彌勒寺は、それぞれ三国の古代寺院伽藍の独自性
国風化への指向していく積極姿勢がみられるものと思われるのである。

終りにあたり、このような朝鮮三国時代の古代寺院伽藍変遷の動きと、わが国における
古代寺院伽藍配置や変遷の関係、殊にわが国の法隆寺式伽藍配置の東アジア史的意義につ
いて、その一端を考察することで本小論のまとめにかえたいと思う。

まとめにかえて

さて泉南市海会寺址は現在の一岡神社境内に位置し、周知の如く中門を入れて左（西方）
に一塔を、右側（東方）に一金堂とその北（西方）方中軸線上に講堂を配し、中門から講
堂に連結する廻廊がめぐる法隆寺式伽藍配置をもつ。法隆寺式伽藍は第一次伽藍たる四天
王寺式が焼失後、西方から西北部を流れていた小河川を整地して、第2次伽藍たる法隆寺
式伽藍を再建して現在に至っているのである^{②⑤}。一方、法隆寺式伽藍と比較して、塔と金堂
の配置が左右逆転した伽藍配置が法起寺式であり、この法隆寺式と法起寺式伽藍は基本的
には同じ範疇に入れても良いと思われるのである。

東アジア史的観点で法隆寺式伽藍をみると、唐の青龍寺址と新羅高仙寺址が注目される。

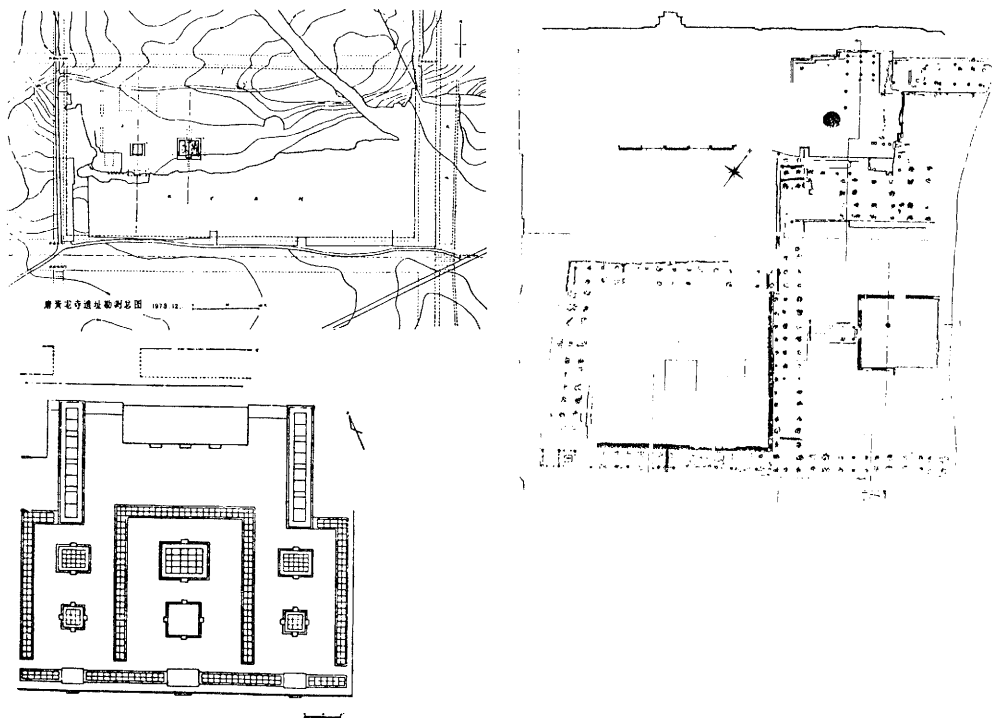


図21 各種伽藍配置図（註②⑥・②⑦・①⑧より）
（左上：中国青龍寺址 左下：益山彌勒寺址 右上：慶州高仙寺址）

唐青龍寺址は削平されていて全容は明らかにできないが、塔と金堂址の遺構が東西に並列しており、塔址の北方中軸線上に建物址が検出されたのみである²⁶⁾（以下、図21参照）。また、慶州の高仙寺址については、徳洞ダム建設に伴い1975年に発掘調査が実施され、調査時に現存していた三重塔は国立慶州博物館の中庭へ移転保存されている。高仙寺の発掘調査結果によると、伽藍の中心部分は東西の二つの区画に分かれて並置されており、西方には石塔を中心とする西院が、東方には金堂を中心とする東院が検出された。そして、講堂址は桁行5間×梁間4間で金堂址の北方に位置し、中門址も金堂址の南方に位置するという伽藍配置であることが判明した。²⁷⁾

慶州高仙寺址は東西両院を区画した廻廊があるとはいえ、巨視的には法隆寺式伽藍配置に近く、朝鮮三国時代の古代寺院中では注目すべき伽藍をもつ寺院址であると考えられる。この高仙寺に関する記録としては、『三国遺事』の神文王6年（686）に「元暁大師が高仙寺に住していた」というのがあるが²⁸⁾、創建年代や縁起についての詳細は不明な寺刹である。しかし、高仙寺は少なくとも7世紀後半に実在したことは事実であり、現存する三重石塔は規模やプロポーションは感恩寺の東西塔に良く似ている。このことは新羅感恩寺の造営完成が神文王2年（682）であり²⁹⁾、高仙寺の創建も7世紀中葉から後半頃に比定するのが妥当であろう。とにかく新羅においても、法隆寺系伽藍配置の初源は7世紀後半といった朝鮮三国時代では、比較的後出の伽藍様式であることは注目されてよい。

このように新羅寺院の中で、高仙寺の如き特異な伽藍配置の出現は新羅の国運が隆盛となり、高句麗の従属関係の脱皮と新国家形成という気風を反映したものとみられる。視点をわが国にむける時、法隆寺式伽藍の出現は東アジア史的に展望した場合、対新羅国との緊迫した国際関係下に出現したものと考えたい。その上、高句麗系伽藍配置たる一塔三金堂形式は、今のところ奈良県法興寺（飛鳥寺）のみであり、百済系伽藍配置たる一塔一金堂一院が一直線に並ぶ形式の四天王寺式は、大阪四天王寺・土師寺や奈良山田寺・橘寺・第1次法隆寺（若草伽藍）・片岡王寺・横井寺などである。このことはわが国古代寺院の初源期が、百済の古代寺院伽藍と最も密接な関係下に発展したことを物語っている。

そして、塔と金堂が並列する法隆寺式や法起寺式伽藍は、わが国での寺院建築に国風化の動きが強まった時期に出現したものであり、わが国で創造された伽藍配置であったと考えざるをえないのである。そういった意味からすれば、法隆寺式伽藍配置の出現は7世紀の後半に求められるとしても、比較的後出（新しい）の時期に比定するのが良いのではなかろうか。

終りにあたり、この小論考がなるについては藤島亥治郎氏の著作（註21）と、金正基氏の論文（註18）に啓発されることが多かったことを記し、種々御教示いただいた永島暉臣慎

氏、千田剛道氏に対し感謝の意を表するものである。

- 註 ① 吉林省文物工作队集安县文物保管所「集安長川一号壁画墓」『東北考古与历史』1. 文物出版社. 1982年9月。
- ② 小泉顕夫「平壤清岩里廃寺址の調査（概要）」『昭和13年度古蹟調査報告』1940年。
- ③ 金日成綜合大学『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』金日成綜合大学出版社. 1976年9月
- ④ 『高麗史』は卷十二、地理三の条、『新增東国輿地勝覽』卷五十二、中和郡陵基の条。
- ⑤ 『三国史記』卷十九、本紀第七、文咨明王7年条参照。
- ⑥ 『新增東国輿地勝覽』卷五一、平壤府、古跡の条に「遺基在府東北八里」に金剛寺の位置を示している。
- ⑦ 『三国史記』卷第二五、百濟本紀第二、枕流王元年の条。
- ⑧ 『三国遺事』卷第二、武康王（武王）条に「一日王與夫人欲幸師子寺、至龍華山下大池邊。彌勒三尊出現池中。留駕致敬。夫人謂王曰。須創大伽藍於此地。固所願也。王許之。（中略）乃法像彌勒三会。殿塔廊廡各三所創之。額曰彌勒寺。（國史記）とある。
- ⑨ 石田茂作「扶餘軍守里廃寺址発掘調査（概要）」『昭和11年度古蹟調査報告』1937年。
- ⑩ 石田茂作・齊藤忠「扶餘に於ける百濟寺址の調査（概要）」『昭和13年度古蹟調査報告』1940年。
- ⑪ 金載元、尹武炳『金剛寺』1969年。
- ⑫ 尹武炳『定林寺址発掘調査報告書』忠南大学校博物館、忠清南道庁. 1981年。
- ⑬ 文化財管理局『彌勒寺址発掘調査中間報告』1982年。
- ⑭ 『三国史記』卷第四、法興王15年の条。
- ⑮ 『三国史記』卷第四、新羅本紀第四。
- ⑯ 『三国遺事』卷三、原宗興法の条参照。
- ⑰ 『三国遺事』卷三、阿道基羅の条に「高句麗僧阿道が訥祇王の王女が病にかかり、その病を治癒させたことを喜び興輪寺を創建した」と記されている。
- ⑱ 金正基「伽藍配置の比較」『韓国史論』16古代韓日関係史、国史編纂委員会. 1986年。
- ⑲ 文化財管理局『皇龍寺』1984年。
- ⑳ 『三国史記』卷第四、新羅本紀第四、眞興王十四年春二月条、二七年春二月条参照。
- ㉑ 藤島玄治郎『朝鮮建築史論』景仁文化社. 1969。
- ㉒ 『三国史記』卷第四、新羅本紀第四、眞興王一四年条、『三国遺事』卷三、皇龍寺丈六の条参照。
- ㉓ 金東賢「三国遺事の皇龍寺址」『第四回学術会議、三国遺事の総合的検討』韓国精神文化研究院』1986年。
- ㉔ 『三国遺事』卷三、皇龍寺九層塔の条「又高宗十六年戊戌冬月。西山兵火。塔寺丈六殿宇皆災」とあり、『高麗史』世家卷二三、高宗二五年夏閏四月の条には「蒙兵至東京燒黃龍寺塔」とみえる。
- ㉕ 奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会編『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』1985年、法隆寺。
- ㉖ 中国科学院考古研究所西安工作隊「唐青龍寺遺址発掘簡報」『考古』1974年5期、科学出版社。
- ㉗ 文化財管理局『高仙寺址発掘調査報告書』慶州史蹟管理事務所. 1977年。
- ㉘ 『三国遺事』卷四、純福不言の条参照。
- ㉙ 『三国遺事』卷二、万波息笛の条参照。